

日本ではイエスが馬小屋で生まれたとされているのはなぜか

平 塚 徹

要 旨

日本では、しばしば、イエスは馬小屋で生まれたと言われる。しかし、西ヨーロッパにおいては、イエスが生まれたのは、家畜小屋である。日本における馬小屋伝承の起源については、これまで研究がなかった。

キリシタン書では、イエスの生まれた場所は、しばしば、「うまや」とされていた。この語は、語源的には馬小屋を意味するが、牛小屋を指すのにも転用されてきた。キリシタン書における「うまや」は、家畜小屋の意味で使われたと考えられる。本稿では、禁教時代を経てキリスト教解禁以後、「うまや」という語が馬小屋の意味で理解されて、馬小屋伝承が流布し定着したという仮説を提案した。その他に、以下の要因が働いた可能性も指摘した。(1) 聖徳太子が厩の前で生まれたという伝説に影響された。(2) 英語においてイエスの生まれた家畜小屋を指すには stable が用いられる。しかし、この語は、通常、馬小屋を指すように意味変化している。(3) ルカ 2 章に出てくる飼葉桶うまぶねの適当な訳語がなく、『明治元訳聖書』や『大正改訳』などの日本語訳聖書で「槽」や「馬槽」が用いられた。

キーワード：イエス、馬小屋、「うまや」、キリシタン、聖書

1. はじめに

日本においては、一般的に、イエスは馬小屋で生まれたと言われている。しかし、西ヨーロッパにおいては、これはむしろ家畜小屋である。キリスト降誕を描いた絵画を見れば、牛とロバが描かれているのが定番であることから、このことは分かる。それでは、なぜ、日本では、これが馬小屋になっているのであろうか。この問題については、研究が見当たらない。そこで、本稿は、この問題を検討する。

2. 家畜小屋伝承

本論に入る前に、イエスが家畜小屋で生まれたという伝承（以下、「家畜小屋伝承」と称する）がなぜあるのかを見ておく必要がある。そもそも、聖書を見ても、このことが明示的に書かれているわけではない。家畜小屋伝承の源としては、ひとつには聖書の解釈、もうひとつには『偽マタイ福音書』が考えられる。

2.1. ルカ福音書 2 章 7 節

イエスが家畜小屋で生まれたことを示しているとしてよく言及されるのは、ルカ福音書 2 章

7 節である。現在の日本で最も代表的な『新共同訳』では、以下のようになっている。

- (1) 初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。(ルカ 2:7)

「飼い葉桶」があったということから、そこが家畜小屋であると考えることができる。イエスが「飼い葉桶」に寝かせられていたという記述は、同書同章の 12 節と 16 節で繰り返される。

- (2) あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」(ルカ 2:12)

- (3) そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。(ルカ 2:16)

しかし、聖書の翻訳の歴史を見ると、ルカ福音書のこの部分が文字通り「家畜小屋」に言及しているという解釈もある。

まず、新約聖書のギリシア語原典に遡ると、「飼い葉桶」に当たる言葉は φάτνη である¹⁾。この語は、家畜の餌を入れる容器を意味していた²⁾。ただし、この容器は大きくて重いものであった可能性が高く、例えば、*The new Oxford annotated Bible* は、a feeding trough for animals と注釈している³⁾。

しかし、φάτνη という語は、「飼い葉桶」を意味するとは限らない。ギリシア語新約聖書では、φάτνη が、もう一箇所ルカ 13 章 15 節に出てくる⁴⁾。ここは、『新共同訳』では、以下のように訳されている。

- (4) しかし、主は彼に答えて言われた。「偽善者たちよ、あなたたちはだれでも、安息日も牛やろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いて行くではないか。(ルカ 13:15)

ここでは、φάτνη は「飼い葉桶」と訳されている。しかし、この語には「家畜小屋」という解釈もある。例えば、『口語訳聖書』は、「家畜小屋」と訳している。

- (5) 主はこれに答えて言われた、「偽善者たちよ、あなたがたはだれでも、安息日であっても、自分の牛やろばを家畜小屋から解いて、水を飲ませに引き出してやるではないか。(ルカ 13:15)

牛やろばを繋いでおくものとしては、「飼い葉桶」よりも、「家畜小屋」の方が適切だと思われるかもしれない。だが、φάτνηは、家畜の餌を入れる容器ではあるが、上述の通り大きくて重い容器であったとも考えられるので、「家畜小屋」と解釈する必要は必ずしもない。しかしながら、ルカ 13 章の φάτνη については、「家畜小屋」という解釈がかなり行われてきた。さらに、旧約聖書のギリシア語訳である『七十人訳聖書』においても、例えば、歴代誌下 32 章 28 節では、φάτνη が「家畜小屋」を意味していると解釈される⁵⁾。『新共同訳』では、「畜舎」と訳されている。

- (6) 補給基地の町を造って、穀物、ぶどう酒、油など農産物を蓄え、畜舎を造って、あらゆる種類の家畜を飼い、柵を造って、羊の群れを飼っていた。(歴代誌下 32 : 28)

このように φάτνη には「家畜小屋」という意味があるので、イエスの降誕について述べているルカ 2 章の φάτνη についても「家畜小屋」だという解釈がある⁶⁾。

ギリシア語の φάτνη は、ラテン語聖書の『ウルガタ』では praesepium と訳されている⁷⁾。この語は、「飼い葉桶」も意味するが、そもそもは「囲い」を意味する語で、そこから「家畜小屋」という意味もある。よって、『ウルガタ』では、イエスを「家畜小屋」に寝かせたと書いてあると取ることも可能なのである。上述の通り、φάτνη はルカ 13 章 15 節にも出てきて、これも praesepium と訳されている⁸⁾。この文脈では、praesepium は牛やろばをつないでおくものなので、「家畜小屋」と取りやすくなる。

praesepium は、スペイン語では pesebre となるが、ラテン語同様に、「飼い葉桶」とも、「家畜小屋」とも取れる語である。スペイン語訳聖書の歴史の中で最も重要な Reina-Valera では pesebre と訳されているが⁹⁾、「飼い葉桶」ではなく「家畜小屋」と取ることも可能である。そして、分かりやすさを重視した *Dios Habla Hoy* はルカ 2 章では全て establo (家畜小屋) と訳している (13 章 15 節では、訳し落としている)¹⁰⁾。このように、聖書自体にイエスが家畜小屋で生まれたと解釈される可能性があったのである。

2.2. 『偽マタイ福音書』

新約聖書の福音書には、マリアの生涯やイエスの子供時代については詳しく述べられていない。そのため、それを補う文書が作られてきた。代表的なものとしては、『ヤコブ原福音書』や『トマスの幼児福音書 (トマスによるイエスの幼児物語)』があるが、この二つの文書を元にして、600 年から 625 年の間に、『偽マタイ福音書』が書かれたと考えられている。この文書には、イエスは洞窟で生まれたとある¹¹⁾。それから、マリア達は洞窟を出て、家畜小屋に入り、イエスを飼い葉桶に寝かせると、牛とロバがイエスを礼拝する¹²⁾。この牛とロバは、イザヤ書 1 章 3 節を踏まえたものである。『新共同訳』では以下の通りである。

(7) 牛は飼い主を知り

ろばは主人の飼い葉桶を知っている。

しかし、イスラエルは知らず

わたしの民は見分けない。

(イザヤ書 1 章 3 節)

これも、家畜小屋伝承の成立に関わっていると考えられる。イエスが生まれた家畜小屋には牛とロバがいたとされているのは、イザヤ書 1 章 3 節を踏まえたものであるが、これらの動物に明示的に言及している点でも、『偽マタイ福音書』の寄与があったと考えるのが妥当であろう。

2.3. まとめ

聖書の記述には、イエスが家畜小屋で生まれたと解釈される可能性があった。また、『偽マタイ福音書』も、家畜小屋伝承の成立に関わっているであろう。この伝承は西ヨーロッパでは定着しているだけでなく、公に認められていると言って良い状態である。例えば、ローマ・カトリック教会公式の教義解説である『カトリック教会のカテキズム』にも、525 項においてイエスは家畜小屋で生まれたとある¹³⁾。

(8) イエスは貧しい家族の一員として、家畜小屋の貧しい環境の中でお生まれになりました。

しかし、イエスは洞穴で生まれたという伝承もあり、これは、特に正教会に受け継がれている¹⁴⁾。このように異なる伝承があるのは、イエスがどこで生まれたかを明確にするものがないためである。このことが、家畜小屋伝承が日本において変化する余地を生み出したと思われる。

3. キリシタン時代

フランシスコ・ザビエルが 1549 年に日本にキリスト教を伝えて以来、キリスト教の布教が行われていく。この時代、イエスはどこで生まれたとされたのだろうか。以下では、キリシタン書により、これを確認していく。

3.1. 『サントスのご作業の内抜書』

『サントスのご作業の内抜書』は、聖人伝を集めたもので、1591 年に加津佐で刊行された。

その中の「アッシジの聖フランシスコ伝」で、イエスが厩で生まれたことが言及されている。

フランシスコの母親が難産で苦しんでいると、門に修行者が物乞いに来た。下女が出ていっ
てものを与えると、修行者が次のように言う（原文はローマ字、翻字は筆者）¹⁵⁾。

(9) tadaima nanzā xitamō fito vmaya ni idetamauba, yafucarubexi (p.174)

(只今難産し給ふ人厩に出で給はば、安かるべし)

厩に出れば、安産になるというのである。そこで、そのようにしたところ、実際にそう
なった。そして、その恩を忘れないように、そこに礼拝堂を建てた。これに続けて、次の説明が続
く。

(10) Core Iefu Chrifto no von xitaximino xiruxi nari. Vonmi vmaya nite vmare tamō ga
yuyeni, cacunogotoqu facarai tamō to miyetari. (p.174)

(これイエスキリストの御親しみのしるしなり。御身厩にて生まれ給ふがゆゑに、か
くのごとく計らひ給ふとみえたり。)

イエス・キリスト自身が厩で生まれたので、そのようにお取り計らいになったのであろうと
いうのである。

3.2. 『ヒイデスの導師』

『ヒイデスの導師』は、ルイス・デ・グラナダ Luis de Granada の *Introduction del Symbolo de la Fe* の第五部を適宜アレンジして日本語に訳したもので、1592年に天草で刊行された。これを見ると、イエスの生まれた場所はたびたび「厩」として言及されている。また、イエスが「馬槽」に置かれていたことも言及されている¹⁶⁾。

(11) エザイヤス一箇条に見えたる如く、牛と、驢馬は主人の厩 (vmaya) を見知るなりといふ語なり。(p. 121)¹⁷⁾

(12) またこの御扶け手のご誕生の時厩 (vmaya) よりほかに、別のご産所なし、この厩 (vmaya) のなかにも馬槽 (vmabune) よりほかに宿り給ふ所なし。(pp. 316-317)

(13) ただ無双の御謙りを以て厩 (vmaya) にご誕生なされ、馬槽 (vmabune) に宿り給ふなり。(p. 336)

(14) ご誕生のために、厩 (vmaya) を求め給ひ、ご入滅の時はクルスを求め給ふなり。(p. 508)

(15) 厩 (Vmaya) に生まれ給ふと雖も、新しき星を以て御約束の御扶け手と顕はし給ふなり。(p. 529)

- (16) 生まれ給ふ厩 (vmaya) を拙き所と思ふならば、天に輝く新しき星を見よ (p. 530)
- (17) 厩 (Vmaya) にご誕生なし給ひ、馬槽 (vmabune) にみ座を占め給ひ (p. 561)
- (18) 天地のご作者厩 (vmaya) に生まれ給ひ、馬槽 (vmabune) にみ座を占め給ひ (p. 570)

なお、「あばらや荒屋」としている箇所もある。

- (19) 荒屋 (abaraya) にて生まれ給ひ、馬槽 (vmabune) に置かれ給ふことは何事を談じ給ふぞ? (p. 502)

『ヒイデスの導師』は、原著の *Introduction del Symbolo de la Fe* と章節が一致していないが、その対応関係は、鈴木 (1980: 174) にまとめられている。これも参考にしながら、原著を調べて見ると、厩の原語は概ね establo (家畜小屋) である。つまり、「家畜小屋」を「厩」と訳したのである。

3.3. 『スピリツアル修行』

『スピリツアル修行』は、1607年に長崎で刊行された宗教書である。この書物の第一部「ロザイロの観念」にも、イエスが「厩」で生まれたとの記述がある (原文はローマ字、翻字は小島 (1989) による)。

- (20) 我等をご済度の為に天降り給ふ量りなきご大切の上より、今厩 (vmaya) にご誕生なされ、[...] (16 裏)

この書物はポルトガル語からの翻訳であり¹⁸⁾、「うまや」の原語は presepio である (小島 (1989) 所収の影印では、prefepio, 現代語の綴字では presépio)。

原典では、presepio は、他に4ヶ所出てくるが、いずれも「うまふね」と訳されている。

- (21) ご産の時至ぬれば、ご誕生なされし御扶け手を先づ礼し給ひ、白布に包み、馬船 (vmabune) に宿し参らせられたる事を観念せよ。(14 裏)
- (22) その故は天も覆ひ尽さず、地も載せ起し奉らざる帝王の上の帝王所しもこそあれ、かの粗き馬船 (vmabune) に藁を茵として、玉体を休め給ふ也。(16 表)
- (23) ケルビンの上に座し給ふ御身は馬船 (vmabune) にて何事をなし給ふぞ? (16 表)
- (24) 潔きご胎内より世界の御扶け手生まれ給ふを深き敬ひを以て拝み給ひ、布のきれにて包み、馬船 (vmabune) に置き参らせられしをアンジョの御告げを以てパストルども参り列なり、[...] (16 裏・17 表)

原典ではイエスの誕生についての箇所連続して presepio が 5 回出てくるのだが、そのうち 4 回は「うまぶね」と訳され、1 回だけ「うまや」と訳されていることになる。このように訳語がふたつありえるのは、ポルトガル語の presépio が、ラテン語の praeseptum およびスペイン語の pesebre と同様に、「飼い葉桶」も「家畜小屋」も意味するからである。

3.4. 『ぎやどぺかどる』

『ぎやどぺかどる』とは、ルイス・デ・グラナダ Luis de Granada の *Guia do peccador* を、1599 年に日本語に抄訳したものである。これでは、イエスの生まれたところを「牛馬のやどるあばら屋」とし、「馬舩」も出てくる¹⁹⁾。

- (25) 御誕生の時も、玉の床にても生れ給はず、^{ぎうば}牛馬のやどるあばら屋にて草の^{むしろ}席に玉體をやすめ給ひ、馬舩の中を御座とさせられ、[…] (下巻、第九)

本来、牛とロバであるところが牛馬となっているが、当時の日本においてなじみのなかったロバが馬に入れ替わったのであろう²⁰⁾。

3.5. 天理本『スピリツアル修行』(国字写本)

『スピリツアル修行』には、3.3 で言及した版本の他に、国字写本が知られている。そのうち、天理図書館が所蔵するものに以下のくだりがある(白井(2004, p. 129)による)。

- (26) 又同敷牛馬を繋ぐあはらやニ御誕生被成し事を始として

牛馬のための「あばらや」としており、『ぎやどぺかどる』と同じである。

3.6. 「厩」とは「馬小屋」のことだったのか

キリシタン書においては、イエスが生まれたのは、しばしば、「厩」とされている。「厩」は、本来は馬小屋の意味であるが、これらの用例ではどうであろうか。牛馬に言及している『ぎやどぺかどる』や天理本『スピリツアル修行』は、「あばら屋」としているのが、本来、「馬小屋」の意味である「厩」を避けたのかもしれない。しかし、『ヒイデスの導師』は、牛とロバに言及しつつ、「厩」の語を用いている。キリシタン時代において、イエスが生まれたところとして「厩」の語が用いられた場合、それは牛馬の類を飼う小屋の意味で用いられていたと考えるべきではないだろうか。

「厩」は、その語形成から、本来は馬を飼うための小屋あるいは部屋の意味だったと考えられる。しかし、実際には、馬だけでなく、牛を飼っている場合でも「厩」と言った。例えば、平

安時代の辞書『和名類聚抄』には、「厩（むまや）」に「牛馬舎也」とある。『国史大辞典』には「牛馬を飼育する舎屋」とあり、『日本国語大辞典』も「牛を飼っておく小屋」の意味を掲載している²¹⁾。日本では、特に西日本において農耕のために馬の代わりに牛を飼う地域があり、そこでは牛を飼う小屋も「うまや」、あるいは、それが転訛したと考えられる「まや」「んまや」と呼ぶことが多い²²⁾。

また、馬を「駄」と呼び、「厩」のことを「駄屋」と呼ぶ地域があるが、牛を飼っていても、この呼称を使っている場合がある²³⁾。さらに、「おりや」や「ながや」という語で、馬小屋と牛小屋の両方を指す方言もある²⁴⁾。これらのことは、馬小屋を指す語が容易に牛小屋を指すのに転用されることを示している。

「厩」は、「馬」と「屋」の複合語であると意識されるので、牛小屋にも適用されたということに疑問を感じられるかもしれない。しかし、これは十分起こりうることである。例えば、「筆入れ」や「筆箱」は、語形成から考えて、筆を入れるものである。しかし、筆記道具が筆から鉛筆やペンなどになっても、これらの語は使われ続けている。また、「下駄箱」も、履物が下駄から靴になっても、やはり、使われ続けている。これは、複合語は話者が内省すれば分析可能であっても、頻繁に使用されることにより全体を単位として処理されるようになり、その語構成から独立した意味変化を受けるようになるためであると考えられる。そこで筆記道具や履物に変化していくと、鉛筆やペンを入れるのに「筆入れ」や「筆箱」と言ったり、靴を入れるのに「下駄箱」と言ったりすることになるのである。同じようにして、馬ではなく牛を飼うようになって、「厩」と呼び続けたと考えられる。

河野（2000：24-25）は、津守国基と源俊頼による短連歌を引用して、平安時代後期には西日本で農耕のために馬の代わりに牛を飼うという変化が進行中だったと推定している。

- (27) 田笠きて はたけに通う翁かな
牛にむまくは（馬鞦） 掛けたるもあやし

津守国基が「田笠」をかぶって「畠」に行くとはどうしたことかと言うと、源俊頼が「牛」に「馬鞦」を引かせているのもおかしいと切り返したのである。キリシタン書の刊行が始まる1591年には、この変化は相当進行していたと推定して良いだろう。そのような状況で、「家畜小屋」がしばしば「厩」と訳されたと考えられる。

馬に関する語が牛に転用されるのは、「厩」や「馬鞦」に限らない。「うまみち」「うまだらい」「ばだらい」「うまいち」「うまおい」と言った語も、牛の場合でも使われた（河野 2000：21-22）。キリシタン書には、「馬槽（馬船）」の語も出てくるが、これも牛馬の餌を入れる容器というつもりで使用されていたと考えられる²⁵⁾。

4. 禁教時代

江戸幕府が1612年および1613年に禁教令を出し、その後、キリシタン書は刊行されなくなる。しかし、その間も、わずかながらイエスの降誕した場所について言及した書物がある。

4.1. 『^{はでうす}破提字子』

禁教時代には、キリシタンを批判するいわゆる「排耶書」と呼ばれる書物が出てくる。その代表的なものが、キリスト教を棄教した不干斎ハビアンが1620年に著した『^{はでうす}破提字子』である。これにも、イエスの生まれた場所についての記述がある²⁶⁾。

(28) 此時ヨリ懐妊シ玉ヒ、十月満ジテ件ノベレンニ於テ、夜半深更ニ及テ^{クリヤ}厩ノ内ニシテ御誕生アレバ、[...] (六段)

イエスは「厩」で生まれたとあるが、読みが「くりや」となっている。「厨」との混同があったのかもしれない。しかし、1868年に杞憂道人こと養鷗徹定が復刻した木活字本は振り仮名を削っている²⁷⁾。また、1893年に神崎一作が編集した『破邪叢書』所収の『破提字子』も振り仮名がない²⁸⁾。これらの刊本は、イエスが「厩」で生まれたという話の流布に寄与したことが推測される。

4.2. 『顯偽録』

ポルトガルの宣教師フェレイラ（沢野忠庵）が棄教してから著した排耶書『顯偽録』（1636）にも、イエスの降誕した場所への言及が見られる²⁹⁾。

(29) 「セスキリシト」ノ生レ給フ處ヲタヅナルニ、二人ノ親「ベレン」トイヘル在所へ行、宿ヲ求エズシテ、其在所ノ近キ所ニ洞ノアケルニ行、ソレニテ「セスキリシト」生ケル也。(p. 17)

(30) 東ニテ見タリシ星、爰ニモ見エケレバ、其ヲシルベトシ、「ヘレン」へ行、彼洞ノ内ニテ「セスキリシト」ヲ見付、[...] (p. 18)

第2節で触れたイエスが洞穴で生まれたという伝承を受け継いでいる。しかし、この伝承への言及は珍しい。

4.3. 『天地始之事』

禁教時代において信仰を捨てずに代々伝えていった人々もいた。これを「潜伏キリシタン」

と呼ぶ。彼らは、『天地始之事』という書物を生み出したが、これは本来のキリスト教から変質が見られる。以下は、文政年間（1818-1830）に書写されたと推定される「善本」を底本として校訂されたものである³⁰⁾。

- (31) かゝる所しきりに大雪ふりいだし、しばらく身をばやどらんと、牛馬うしうまの小家こやの其間に、身をちぢまして凌がせける。所にひるの八つよりぜしんの為され、夜半比に御誕生、則御身様これなり。

さて寒中ゆへ、御身凍らせたもふを、左右牛馬息をつきかけ、其かげにて御体あたゝまり、さむさを凌がせたもふ。食はみ桶おけにてうぶ湯をなされ、牛馬より此なさけを受けたもふゆへ、くわるたの日は、ぜしん、畜類・鳥類服用する事、無用也。

イエスが生まれたのは、「牛馬の小屋」とあり、また、牛と馬がいたとある。更に、飼い葉桶が、「食はみ桶おけ」として言及されている。これは、5.2で述べる通り、九州方言である。キリスト教解禁後、潜伏キリシタンの中には、カトリック教会に復帰していった人々がいる。彼らは、本来のキリスト教からは変化してしまった潜伏キリシタンの信仰を捨てていった。他方、カトリック教会に復帰することなく先祖伝来の信仰を守り続けた人々もいる。しかし、彼らが潜伏キリシタンの信仰を広めることはなかった。よって、イエスが生まれた時に牛と馬がいたという『天地始之事』の伝承が一般に流布することはなかったと考えられる。

4.4. 『西洋紀聞』

1708年に日本に潜入してきたイタリア人宣教師シドッチを、新井白石が尋問し、その結果を『西洋紀聞』にまとめる。この書物においても、キリスト教のあらましが説明されていて、イエスの降誕については、以下のように述べられている³¹⁾。

- (32) こゝにおゐて、ジョセフをともし、ナザレツを去り、バイテレウエンムマヤの駅に至りて、つゐに男女の道にあずからずして、男子を其厩中に産む。

このくだりは、イエスは厩で生まれたとされていると考えて良いだろう。もっとも、これは、シドッチの言ったことをそのまま記録したというよりは、キリスト教について集めた情報を踏まえた上でまとめたものと考えべきである。そうすると、厩で生まれたというのは、キリシタン書における記述も継承しているであろうと推測される。

この書物は、その性質上、長い間秘匿されていたが、少しずつ読まれ、書写されていった。そして、江戸時代後期には、会沢正志斎が『西洋紀聞』を引用しつつそれに対して見解を述べる『三眼餘考』を表している。その中には、(32)を含むイエスの降誕の場面もある³²⁾。また、

安政の頃には、『西洋紀聞』は江戸の古本屋に写本が出るぐらい流布していた³³⁾。キリスト教が解禁された後、1882年には大槻文彦の校訂により出版された。

5. キリスト教解禁以降

キリスト教は1873年に解禁される。その後、イエスは馬小屋で生まれたという伝承（以下、「馬小屋伝承」）が定着していく。例えば、カトリックの教義を問答形式で解説する天主公会編『公教要理』（1896）には、以下のようにある³⁴⁾。

- (33) ○イエズス、キリストは何處いづこに生れ給うまひしや
△イエズス、キリストはユダヤ國こくのベトレヘムおい うまや なかに於て厩うま たまの中にて生れ給へり (p. 22)

「厩」をヘボンによる和英辞典『和英語林集成』で引くと、初版（1867）および再版（1872）では A horse stable、三版（1886）ではハイフンが入って A horse-stable となっている。「厩」は基本的には「馬小屋」として理解されたと思われる。例えば、『新約こども聖書』には、「馬うまを繫つないでおく小舎こや」とある³⁵⁾。

- (34) ところが此この夕方ゆふがたベトレヘムむらの邑むらには、やはり此この戸籍調こせきしらべをうけに來きた人々ひとへが澤山たくさん宿やどつてゐましたので、もはやこの宿屋やどやにも泊とまれる座敷ざしきがありません、そこでヨセフ夫婦ふうふは、仕方なしに旅人たびとが馬うまを繫つないでおく小舎こやに入り、こゝで一夜ひとよを明あかさうとしました。それは寒い〜冬ふゆの晩ばんでありました。二人ふたりがやつと疲つかれた身體からだを敷藁しきわらの上に横うへたへて、暫しばらく休やすまうとしますと、マリアにはかは俄さんけに産氣うまづき、やがてたまたまやううつくな美うつくしい男をとこの子こが生うまれましたので、ヨセフあはは慌あはてながらも甲斐々々かひへしく立たち働はたらき、生うまれた子こをば布片ぬのにつめんで、有あり合あはせの飼料槽かひをけ なかの中いに入れておきました。

本稿では、このように馬小屋伝承が定着していった大きな要因として、以下のような仮説を提案する。キリシタン時代には、イエスが家畜小屋で生まれたことは、「うまや」で生まれたと訳されていた。しかし、禁教時代には、「うまや」という言葉が限定的に伝えられた。キリスト教解禁の頃から、イエスが「うまや」で生まれという話が流布したが、多くの場合、これは馬小屋のこととして理解された。その結果、馬小屋伝承が定着した。

しかし、ここには他の幾つかの要因が協働している可能性がある。例えば、聖徳太子が厩の前で生まれたという貴種出生譚との連想が働いたことも考えられる。1905年に久米邦武が『上宮太子実録』（pp. 22-23）において、聖徳太子とイエスの出生譚に類似点が見られることを指摘するが³⁶⁾、このことは両者が連想されやすい状況にあったことを示していると言える。ま

た、英語でイエスの生まれた家畜小屋を指すのに用いられる stable の語にも問題がある。この語は、ラテン語の stabulum、古フランス語の stable に由来し、もともとは家畜小屋を意味したが、現在では馬小屋の意味で使われるのが普通になっている³⁷⁾。このため、イエスが生まれた家畜小屋を指す stable が、馬小屋と誤解されやすいのである。

以下では、ルカ 2 章 7 節・12 節・16 節および 13 章 15 節がどのように日本語に訳されてきたかを見て、馬小屋伝承の定着に働いている要因を更に検討する³⁸⁾。

5.1. 『明治元訳聖書』

ヘボン (J. C. Hepburn) とブラウン (S. R. Brown) の『新約聖書路加傳』(1875) から翻訳委員社中の『新約聖書路加傳』および『新約全書』をへて『舊新約全書』(1887) (いわゆる『明治元訳聖書』) に至るまでを見ると、いずれも、ルカ 2 章 7 節、12 節、16 節では、「槽」を用いている³⁹⁾。『舊新約全書』の該当箇所は以下の通りである。

- (35) 冢子うひこを生うみそれを布ぬのに裏つつみて槽うまぶねに臥ふさせたり此こは客舍はたごやに彼等かれらの居處をるところなかりしが故ゆゑなり (ルカ 2:7)
- (36) 爾曹(なんぢら)ぬの布つつみにて裏をさなこし嬰兒うまぶねの槽ふしに臥みたるを見これん是しるしその徴しるしなり (ルカ 2:12) (括弧内のルビは引用者)
- (37) 急いそぎ至いたりマリアとヨセフまた槽ふしに臥をさなこたる嬰兒たづねあへに尋み遇あり (ルカ 2:16)

『明治元訳』の翻訳においては、ブリッジマンとカルバートソンによる漢訳聖書『新約全書』および『旧約全書』が参考にされた。ルカ 2 章の「槽」という漢字表記は、『新約全書』をそのまま引き継いでいる⁴⁰⁾。「槽」とあるだけでは、馬の餌の容器とは断定できないが、「うまぶね」とルビがついている。明治元訳の翻訳作業に中心的に関わったヘボンによる和英辞典『和英語林集成』では、「うまぶね (槽)」は、三版で登録され、A horse trough, a manger となっている⁴¹⁾。

なお、ルカ 13 章 15 節では、「厩」としている。

- (38) 主しゆかれに答こたへて日いひけるは偽善者ぎぜんしやよ爾曹なんぢらおのおの安息日あんそくにちには其牛そのうしや驢ろばをとき厩ごやより牽出ひきだし
て水みづを飲のまさざる乎か (ルカ 13:15)

これも、ブリッジマン・カルバートソンの漢訳聖書の表記を継承しているが、「ごや」とルビをふっている⁴²⁾。牛やロバの小屋なので「うまや」とルビを振ることができず、また、家畜小屋を指す適当な言葉もなく、やむを得ず「ごや」としたのであろう。

5.2. ブラウン『志無也久世無志与』『留加亭無』

パプテスト派のN・ブラウン (N. Brown) は、翻訳の方針の違いからヘボンやS・R・ブラウンらと別れて、独自の翻訳を出す。1879年に出した『志無也久世無志与』では、「はみぶね」という語を用いている⁴³⁾。

- (39) とき すぎて こゝに をる うちに うむ とき みちければ ういごを うみ
これを つゝみ まきて はみぶねに ふさせたり, (ルカ 2:6)
- (40) なんぢら つゝみ まかれたる をさなごの はみぶねに ふしたるを みんな, (ルカ
2:12)
- (41) さて いそぎ ゆきて まりやと よせふ また はみぶねに ふしたる みどりご
に たづね あへり。(ルカ 2:16)

「はみぶね」という語は、『日本国語大辞典』にも登録されていない。稀な語であり、造語の可能性もある。このような語を敢えて使用したのは、馬ではなく家畜一般の餌を入れる容器であることを表すためであろう。さらに、2章6節の「はみぶね」に、「aruwa, uçigoyàni」つまり「あるいは、うしごやに」という注釈がついる。ブラウンは、イエス降誕の場面が馬小屋ではなく、牛がいる家畜小屋であることを重視していたと考えられる。

ブラウンは、1883年に、『留加亭無』(Yokohama Bible Press)を出す。ここでは、「はみぶね」を「はみをけ」という語に変えている⁴⁴⁾。

- (42) とき すぎて こゝに をる うちに うむ とき みちければ ういごを うみ
これを つゝみ まきて はみをけに ふさせたり, (ルカ 2:6)
- (43) なんぢら つゝみ まかれたる をさなごの はみをけに ふし をるを みんな。(ル
カ 2:12)
- (44) ついに いそぎ ゆきて まりあと よせふ また はみをけに ふしたる みどり
ごに たづね あへり。(ルカ 2:16)

「はみおけ」とは、牛馬の飼料を入れる桶を表す九州方言である。『日本国語大辞典』によれば長崎県壱岐島および大分県で確認されている。また、天草や宮崎県などでも使用されている⁴⁵⁾。そして、4.3で取り上げた潜伏キリシタンによる『天地始之事』では、イエスの産湯のための容器として出てきている((31)参照)。おそらく、ブラウンは、家畜の餌を入れる容器を表す語を探しあぐねた末に、この語を見つけ出して訳語に採用したのであろう。なお、戦後に出る『口語新約聖書』で採用される「飼葉おけ」は、『日本国語大辞典』の初出例が1904年のものであり、『留加亭無』出版の20年後である。ブラウンはこの語を知らなかったと推定し

て良いであろう⁴⁶⁾。

なお、ルカ 13 章 15 節では、『志無也久世無志与』と『留加亭無』のいずれも、「こや」としている。『明治元訳聖書』において「厩」に「こや」というルビを振ったのと、同じ事情であろう。

5.3. 大正改訳『改譯新約聖書』

『明治元訳聖書』の新約聖書については、1917 年に改訳が出版された。ルカ 2 章の問題の箇所は以下の通りである⁴⁷⁾。

- (45) 初子をうみ之を布に包みて馬槽に臥させたり。旅舎にをる處なかりし故なり。(ルカ 2:7)
- (46) なんぢら布にて包まれ、馬槽に臥しをる嬰兒を見ん、是の徴なり。(ルカ 2:12)
- (47) 乃ち急ぎ往きて、マリヤとヨセフと、馬槽に臥したる嬰兒とに尋ねあふ。(ルカ 2:16)

『明治元訳聖書』では、「槽」だったものが、『改譯新約聖書』では、「馬槽」となっている。漢語に無理なルビを振ることを避けるという方針によるものと思われる。『明治元訳』では漢訳聖書に由来する「槽」に「うまぶね」というルビを振っていたが、『改譯新約聖書』では「うまぶね」という読みに適った「馬槽」という表記を採用したのである。これは、馬小屋伝承に更に合致した表記になっている。

なお、ルカ 13 章 15 節で、牛とロバをつなぐ場所は「小屋」となっている。『明治元訳』で漢訳聖書に由来する「厩」に「こや」というルビを振っていたが、その読みに合わせて「小屋」という表記に改めている。

5.4. 『口語新約聖書』

戦後、日本聖書協会が『口語訳聖書』を出す。『改譯新約聖書』の「馬槽」が、「飼葉おけ」に改められる。

- (48) 初子を産み、布にくるんで、飼葉おけの中に寝かせた。客間には彼らのいる余地がなかったからである。(ルカ 2:7)
- (49) あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである (ルカ 2:12)
- (50) そして急いで行って、マリヤとヨセフ、また飼葉おけに寝かしてある幼な子を探しあ

てた。(ルカ 2 : 16)

馬ではなく、家畜の餌を入れる容器であることが考慮されたと思われる。この「飼葉おけ」という訳語は、その後、以下の表の通り、多くの日本語訳聖書に継承されている。表には、ルカ 13 章 15 節で用いられている訳語も含めた。

5.5. カトリック教会の日本語訳聖書

表 1 「飼葉おけ」を継承している日本語訳聖書

	ルカ 2	ルカ 13 : 15
『口語訳』	飼葉おけ [(48), (49), (50)]	家畜小屋 [(5)]
『新改訳』第 1 版・第 2 版・第 3 版	飼葉おけ	小屋
『新改訳 2017』	飼葉桶	飼葉桶
『共同訳』	飼い葉桶	飼い葉桶
『新共同訳』	飼い葉桶 [(1), (2), (3)]	飼い葉桶 [(4)]
『岩波文庫版聖書』	飼葉桶	小屋
『岩波委員会訳聖書』	飼い葉桶	飼い葉桶

カトリック教会においては、高橋五郎の訳により、1895 年に『聖福音書 上』が⁴⁸⁾、1897 年に『聖福音書 下』が出る。この翻訳では、ルカ 2 章及び 13 章で「^{かひぼね}芻槽」という訳語が使われている⁴⁸⁾。

- (51) うひご う 家を生みければ、これ むつき つい、^{かひぼね なか ふさ}芻槽の中に臥しめき、こ やどや ^{かれら}彼等の
〔^い入るべき〕^{ところ}處なかりしが^{ゆゑ}故なり。(ルカ 2 : 7)
- (52) ^{なんぢら}汝等これを^{もつ}以て^{しるし}徴號とせよ、^{すなは なんぢら みどり こ}即ち汝等^{むつき つい、}緑兒の^{かひぼね ふさ}襦褌に^か裹まれて^か芻槽に^か臥しめられたる
を見ん。(ルカ 2 : 12)
- (53) ^{かれら いそ いた}彼等^{すなは}急ぎ到れば、^{かひぼね ふし みどり こ}則ち^{あへ}マリアとヨセフと^{あへ}芻槽に^{あへ}臥たる^{あへ}緑兒とに^{あへ}遇り。(ルカ 2 : 16)
- (54) ^{かれ}彼に^{こた}答へて^{しゆ}主の^{いひ}言たまはく、^{ぎ ぜんしやども}偽善者等よ、^{なんぢら}汝等は^{おのへあんそくじつ}各々^{そのうし}安息日^{ろ ぼ}に^{かひぼね}其牛や^{かひぼね}驢馬を^{かひぼね}芻槽より
^{とき}解はなし^{ひきいだ}牽出して^{これ}之に^{みづか}飲はざるか。(ルカ 13 : 15)

この「^{かひぼね}芻槽」という語には注釈が付いており、以下のように説明されている。

- (55) 厩中隔の處へ造り附てある長き船の形をなせし重く動かざる物にして其中へ秣及び水を入れ其高さ二三尺にて牛馬幾頭も縛り附けて置き自由に飲食さする様に造りし物なり。

「かいばぶね（かひばぶね）」は、『日本国語大辞典』にも登録されていない。稀な語であり、造語の可能性もある。『明治元訳』の「槽」という訳語を回避しようとしたことを窺わせる。語釈に「牛馬」とあることやルカ 13 章で使われていることも考えると、馬に限定されないようにしたと推定される⁴⁹⁾。(55)の「芻槽」の語釈の冒頭には「厩」とあるが、その後「牛馬」が出てくるので、馬小屋ではなく、家畜小屋のつもりで使われていると考えられる。なお、戦後の『口語新約聖書』で使われる「飼葉おけ」は、『日本国語大辞典』の初出例が数年後の 1904 年である。この時点で既に使用されていたとしても、まだ、『聖福音書』の訳者である高橋五郎は知らなかった可能性が高い。

エミール・ラゲ訳『我主イエズスキリストの新約聖書』（1910）は、「馬槽」としている⁵⁰⁾。ただし、13 章 15 節では『聖福音書』の「芻槽」を継承している。牛やロバを繋ぐところを「馬槽」と呼ぶのは不適切だという判断であろう。そうすると、逆に、12 節の「馬槽」は馬の餌を入れる容器と考えても構わないということになり、馬小屋伝承を受け入れている形になっている。

バルバロ訳では、2 章では「まぐさおけ」を使用している⁵¹⁾。「まぐさ」は語源的には馬の餌を意味すると思われる語である。しかし、13 章 15 節で馬やロバをつなぐ場所も「まぐさおけ」としているので、これは家畜の餌を入れる容器と取ることができる。

フランススコ会訳では、2 章で「かいばおけ」を、3 章 15 節で「飼葉おけ」を使用している⁵²⁾。これは、家畜の餌を入れる容器である。ところが、2 章 7 節の「かいばおけ」に注釈がついていて、イエスが馬小屋で生まれたと説明している（もっとも、イエスが洞穴で生まれたと言う伝承にも言及している）。

5.6. 永井直治訳『新契約聖書』

戦前の個人訳として、永井直治による『新契約聖書』がある。初版（1928）および第三版（1932）においては、ルカ 2 章で、「馬槽」を用いているが、第三版修正改版（1960）においては、これを「馬小屋」に改めている⁵³⁾。

- (56) かくて彼は長子なるその子を産めり。されば産着に包みて馬小屋のうちに臥させたり。(ルカ 2:7)
- (57) されば汝等産衣に包まれて馬小屋に臥し給ふ嬰兒を見出ださん、これその徴なり。(ルカ 2:12)

- (58) 乃ち彼等は急ぎ到りて、マリアとヨセフ、また馬小屋に臥し給ふ嬰兒を見出だせり。
(ルカ 2 : 16)

これは、馬小屋伝承に最も合致する訳になっている。なお、ルカ 13 章 15 節では、初版、第三版、第三版修正改版のいずれにおいても、単に「小屋」としている。

5.7. 渡瀬主一郎・武藤富男訳『新約聖書』

1952 年にキリスト教新聞社が、渡瀬主一郎・武藤富男訳『新約聖書』を刊行する。これでは、「家畜小屋」が用いられている⁵⁴⁾。

- (59) 男の子、即ち初子を生み、包んで家畜小屋に寝かせた。(ルカ 2 : 7)
(60) あなた方は、包まれて家畜小屋にねかされている嬰兒を、見るであろう。(ルカ 2 : 12)
(61) そしてマリヤとヨセフと家畜小屋にねている嬰兒とを見出した。(ルカ 2 : 16)

これは、イエスが生まれたのは馬小屋ではなく、家畜小屋であるということを明示した訳になっている。なお、ルカ 13 章 15 節では、「小屋」としている。

5.8. 日本語訳聖書についてのまとめ

『明治元訳』では「槽」^{うまぶね}、大正改訳『改譯新約聖書』では「馬槽」^{うまぶね}という語が使用されていて、馬の餌の容器と理解される。他方、N・ブラウンは「はみぶね」や「はみをけ」という語を、高橋五郎は「芻槽」^{かひぶね}という語を用いており、馬の餌の容器だと取られないようにしていると思われる。しかし、いずれもあまり普通の語ではない。逆に言うと、『明治元訳』や『改譯新約聖書』で「うまぶね」という語が使われたのは、他に良い訳語がなかったという理由もあったのであろう。その結果、馬小屋伝承を補強することになった。この訳語の問題は、『口語新約聖書』の「飼葉おけ」で解決された。実際、この訳語は、表記を変えながらも、『口語訳』、『新改訳』、『共同訳』、『新共同訳』に引き継がれ、カトリック教会のフランシスコ会訳や、無教会派の『岩波文庫訳聖書』および『岩波委員会訳聖書』でも採用されている。

しかし、馬小屋伝承は定着しており、フランシスコ会訳は、「飼葉おけ」を採用しながら、イエスは馬小屋で生まれたと注釈している。カトリックにおいては、『公教要理』で馬小屋伝承を認めていたのである。更に、個人訳の中には、永井直治訳『新契約聖書』のように、文字通り「馬小屋」に言及するものも出た。他方、渡瀬主一郎・武藤富男訳『新約聖書』のように、「家畜小屋」という語を用いるものもある。また、近年においては、カトリック教会においても、日本語版『カトリック教会のカテキズム』で、イエスが家畜小屋で生まれたとしている ((8)

参照)。しかし、日本においては、馬小屋伝承は根強く定着しており、容易には変化することはないであろう。

6. 東アジアの日本以外の地域

ここまで、日本における馬小屋伝承について見てきた。しかし、韓国や中国においてもイエスの生まれた場所に馬小屋に当たる語が用いられている。また、聖書の翻訳においては、イエスの置かれた場所についても馬の餌の容器を指す語が用いられている。

韓国では、イエスは、마구간あるいは마굿간(漢字表記では、「馬厩間」)、つまり、馬小屋で生まれたと言われる⁵⁵⁾。しかし、この語は極めて広範な地域(江原道・京畿道・慶尚道・全羅南道・咸鏡道)において、家畜小屋も意味するのである⁵⁶⁾。これは、日本において、「うまや」やその変異形がさまざまな地域において牛小屋をも意味することによく似た状況である。마구간(마굿간)は、イエスの生まれた場所としては、家畜小屋の意味で用いられていた可能性がある。しかし、この語を通常の意味で理解すると、馬小屋伝承になるのである。

また、韓国語訳聖書においては、ルカ2章でイエスが置かれた場所は、구유(飼い葉桶)とするものが多いが、말구유(馬の飼い葉桶)とするものもある⁵⁷⁾。これは、馬小屋伝承に因るものであろう。

中国では、イエスが「馬厩」(簡体字では「马厩」)、つまり、馬小屋で生まれたと言われることがある。これについては、「厩」という語の意味が原因になっている可能性がある。「厩」は、本来、馬小屋を意味するのだが、広義には家畜小屋も意味する。そうすると、イエスが生まれた家畜小屋も、「厩」と表された可能性がある。これが本来の意味の馬小屋として理解されることもありえる。

また、中国語訳聖書においては、ルカ2章でイエスが置かれた場所はしばしば「馬槽」と訳されてきた⁵⁸⁾。これは、馬小屋伝承に因るものであろう。

このように、日本に限らず、韓国や中国においても、馬小屋伝承が存在している。馬小屋を意味する韓国語의마구간(마굿간)や中国語の「厩」が家畜小屋も意味し得ることがその原因になっている可能性がある。

7. まとめ

西ヨーロッパで見られる家畜小屋伝承は、日本では馬小屋伝承に入れ替わっている。キリシタン書を見ると、イエスの生まれた場所は、しばしば、「うまや」とされている。この語は、語源的には、馬小屋を意味するが、牛小屋を指すのにも転用されてきた。キリシタン書における「うまや」は、家畜小屋の意味で使われたと考えられる。本稿では、禁教時代を経てキリスト教

解禁以後、「うまや」という語が馬小屋の意味で理解されて、馬小屋伝承が流布し定着したという仮説を提案した。その他に、以下の要因が働いた可能性も指摘した。(1) 聖徳太子伝説の影響。(2) 英語においてイエスの生まれた家畜小屋を指す stable が通常は馬小屋を指すように意味変化していること。(3) ルカ 2 章に出てくる飼い葉桶に適当な訳語がなく、主要な日本語訳聖書で「槽」や「馬槽」が用いられたこと。

なお、馬小屋伝承は、韓国や中国にも見られる。このことについては、日本の場合と同様に、それぞれ、馬小屋を指す語の多義性によるものである可能性があることを指摘した。

注

- 1) 原文は以下の通り。
 - (i) καὶ ἔτεκεν τὸν υἱὸν αὐτῆς τὸν πρωτότοκον, καὶ ἐσπαργάνωσεν αὐτὸν καὶ ἀνέκλινεν αὐτὸν ἐν φάτνῃ, διότι οὐκ ἦν αὐτοῖς τόπος ἐν τῷ καταλύματι. (ルカ 2 : 7)
 - (ii) καὶ τοῦτο ὑμῖν τὸ σημεῖον, εὐρήσετε βρέφος ἐσπαργανωμένον καὶ κείμενον ἐν φάτνῃ. (ルカ 2 : 12)
 - (iii) καὶ ἦλθαν σπεύσαντες καὶ ἀνεῦραν τὴν τε Μαριάμ καὶ τὸν Ἰωσήφ καὶ τὸ βρέφος κείμενον ἐν τῇ φάτνῃ. (ルカ 2 : 16)
- 2) φάτνη は、特に馬の餌を入れる容器を指したが、牛の餌を入れる容器も指した (Liddell and Scott 1996; Montanari 2015)。ルカ 2 章の φάτνη については、Liddell and Scott (1996) は、馬の餌を入れる容器の意味の用例としている。しかし、本文で後述する通りルカ 13 章 15 節にも φάτνη が出てくるが、これが飼い葉桶であるなら、文脈から考えて牛とロバの餌を入れる容器である。また、マリアの生涯を描いた『ヤコブ原福音書』(2 世紀成立)の 22 章 2 節には、ヘロデが赤児を殺す命令を出したことを聞いて恐れたマリアが、子供を布で包み、牛の飼い葉桶に横たえたとある(『新約外典 I』(『聖書外典偽典 6』) 教文館, 1976 年, p. 111)。「牛の飼い葉桶に横たえた」の原文は ἐβαλεν ἐν πάθνη βοῶν (Bauer 2000) で、φάτνη の異形 πάθνη が用いられている。このくだりはルカ 2 章を踏まえたものと考えられるが、これはルカ 2 章の φάτνη が牛の餌を入れる容器として理解されていたことを示唆する。
- 3) *The new Oxford annotated Bible : with the Apocrypha*, Fully revised fourth edition, New York : Oxford University Press, 2010, p. 1832.
- 4) 原文は以下の通り。
 - (i) ἀπεκρίθη δὲ αὐτῷ ὁ κύριος καὶ εἶπεν· ὑποκριταί, ἕκαστος ὑμῶν τῷ σαββάτῳ οὐ λύει τὸν βοῦν αὐτοῦ ἢ τὸν ὄνον ἀπὸ τῆς φάτνης καὶ ἀπαγαγὼν ποτίζει; (ルカ 13 : 15)
- 5) 原文は以下の通り。
 - (i) καὶ πόλεις εἰς τὰ γενήματα σίτου καὶ ἐλαίου καὶ οἴνου καὶ φάτνας παντὸς κτήνους καὶ μάνδρας εἰς τὰ ποιμνία (歴代誌下 32 : 28)
 Bauer (2015) は、stall という訳語をあげて、用例としてここを挙げている。
- 6) ルカ 2 章に出てくる φάτνη の本来の意味については議論がある。Haupt (1920) は、宿屋の中庭に面した客室の前のくぼんだところとしている。Cadbury (1926, 1933) は、屋外の家畜に餌を与える場所としている。Bauer (2000) は、馬小屋やその他の可能性を挙げている。しかし、本稿では、この語が後世においてどのように解釈されたかが重要であり、元々どういう意味であったかということは問題ではない。
- 7) 原文は以下の通り。
 - (i) et peperit filium suum primogenitum et pannis eum involvit et reclinavit eum in praesepio quia non erat eis locus in diversorio (ルカ 2 : 7)
 - (ii) et hoc vobis signum invenietis infantem pannis involutum et positum in praesepio (ルカ 2 : 12)
 - (iii) et venerunt festinantes et invenerunt Mariam et Ioseph et infantem positum in praesepio (ルカ

- 2 : 16)
- 8) 原文は以下の通り。
 (i) respondit autem ad illum Dominus et dixit hypocritae unusquisque vestrum sabbato non solvit bovem suum aut asinum a praesepio et ducit adquare (ルカ 13 : 15)
- 9) https://archive.org/details/lasantabiliaant00rein_0.
- 10) *Dios habla hoy: la Biblia, versión popular*, Segunda Edición, Nueva York: Sociedades Bíblicas Unidas, 1979。原文は以下の通り。
 (i) Y allí nació su hijo primogénito, y lo envolvió en pañales y lo acostó en el establo, porque no había alojamiento para ellos en el mesón. (ルカ 2 : 7)
 (ii) Como señal, encontrarán ustedes al niño envuelto en pañales y acostado en un establo.» (ルカ 2 : 12)
 (iii) Fueron de prisa y encontraron a María y a José, y al niño acostado en el establo. (ルカ 2 : 16)
 (iv) El Señor le contestó: —Hipócritas, ¿no desata cualquiera de ustedes su buey o su burro en sábado, para llevarlo a tomar agua? (ルカ 13 : 15)
- 11) 『ヤコブ原福音書』18章～19章(『新約外典Ⅰ』(『聖書外典偽典6』) 教文館, 1976年, pp. 107-109; 荒井献編『新約聖書外典』講談社学術文庫, 1997年, pp. 39-41), ユスティノス『ユダヤ人トリュフォンの対話』78章(*Writings of Saint Justin Martyr (The Fathers of the Church, a New Translation, vol. 6)* Washington D. C.: The Catholic University of America Press, 1965, p. 272), オリゲネス『ケルソス駁論』1巻51章(『オリゲネス3(ケルソス駁論Ⅰ)』出村みや子訳(『キリスト教教父著作集8』) 教文館, 1987年, p. 96)も、イエスが洞窟で生まれたとしている。
- 12) Gijssel (1997: 430-431)。
- 13) 『カトリック教会のカテキズム』カトリック中央協議会, 2002年。
- 14) 『正教要理問答』(正教会事務所, 1896年, 国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/infondljp/pid/824722>)) には、以下のようにある。
 (i) 其夜洞穴の中にて我等の主イ、ス、ハリストスは生れ給へり (p. 72)
- 15) 『サントスのご作業の内抜書』(キリシタン版精選) 雄松堂出版, 2006年。
- 16) 翻字は, 尾原悟編著『ヒイデスの導師』(キリシタン文学双書, キリシタン研究第32輯, 教文館, 1995年)による。ローマ字原文は, 鈴木博編『キリシタン版ヒイデスの導師』(清文堂出版, 1985年)で確認した。なお, 「馬槽」を, 「ペレセピオ」としている箇所もある。
 (i) 厩 (vmaya) のなかペレセピオ (Presepio) にまします若君を真のデウスなりと (p. 554)
 こは, 原文に対応する箇所が見当たらないので, 翻訳の過程で挿入されたものであらうと思われる。
- 17) これはイザヤ書1章3節に言及したものであるが, イエスの降誕と結びつけられて解釈されている(2.2参照)。
- 18) 「ロザイロの観念」の原典は, 初版本のイタリア語本ではなく, ポルトガル語訳本である(小島1982)。
- 19) 豊島正之編『キリシタン版ぎやどべかどる: 本文・索引』清文社, 1987年。
- 20) ロバには, 古来より, 耳が長いことから「兎馬^{うさぎうま}」という別名もあったが, この名前もロバが馬に似た動物であると捉えられていたことを示している。『天草本伊曾保物語』(ESOPONO FABVLAS)の「狗兒と馬の事」(Yenocoto, vmano coto.)は, 登場するのはyenoco(狗兒)とroba(驢馬)であるにもかかわらず, 題名ではyenoco(狗兒)とvma(馬)となっている。ロバをロバと訳すか, 馬と訳すかで, 揺れが見られる。(ローマ字原文は, 京都大学文学部国語学国文学研究室編『文禄二年耶蘇会板伊曾保物語』(再版, 京都大学国文学会, 1965年), 翻字は, 『天草本伊曾保物語』(新村出翻字, 岩波文庫, 1939年)による)。
- 21) 『日本国語大辞典』は, 「牛を飼っておく小屋」という意味を登録しているにもかかわらず, 「馬を飼っておく小屋」の意味の方に, 「スピリツアル修行」の用例(本稿の(20))をあげている。しかし, 本稿では, この用例は牛馬を飼うための小屋の意味で用いられたと考える。
- 22) 『日本民家語彙集解』(1985)「ウマヤ」, 河野(1990: 156), 『図説日本の馬と人の生活誌』(1993: 92),

- 『図説民俗建築大事典』(2001: 73), 香月・野本編(2002: 139), 河野(2000: 21-22)。個別の方言については、『現代日本語方言大辞典』(1992-1994)「こや」「なや」, 東條編(1951)「まや」, 『長崎県方言辞典』(1993)「まや」, 『島根県方言辞典』(1963)「まや」。
- 23) 橘(1937: 170)。個別の方言については、『日本方言大辞典』(1989)「だや」, 『現代日本語方言大辞典』(1992-1994)「こや」, 『島根県方言辞典』(1963)「だや」。
- 24) 東條編(1954)「うまごや」, 『日本方言大辞典』(1989)「おりや」「ながや」。
- 25) 牛馬の飼料を入れる容器を「ウマノフネ」という方言もある(能田 1963「ウマノフネ」)。
- 26) 『キリシタン書 排耶書』(『日本思想体系 25』), 岩波書店, 1970年, p. 438。
- 27) 同, p. 638。
- 28) 国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/825035>)。
- 29) 『ぎゃ・ど・べかどる(上巻)(下巻): 妙貞問答; 破提字子; 顯偽録』覆刻日本古典全集, 現代思潮社, 1978年。
- 30) 『キリシタン書 排耶書』(『日本思想体系 25』) 岩波書店, 1970年, p. 392。
- 31) 『新訂西洋紀聞』(東洋文庫 113) 平凡社, 1968年, p. 87。
- 32) 『吉利支丹史料』(日本宗教講座) 東方書院, 1935年, pp. 14-15。
- 33) 『新訂西洋紀聞』(東洋文庫 113) 平凡社, 1968年, p. 445。
- 34) 国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/824441>)。
- 35) 蘆谷重常『新約こども聖書』15版, 警醒社書店, 1925年(初版は1912年)。
- 36) 国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/780770>)。
- 37) *OED2*では, stable は A building fitted with stalls, loose-boxes, rack and manger and harness appliances, in which horses are kept. Formerly used in a wider sense: † a building in which domestic animals, as cattle, goats, etc. are kept. と説明されている。
- 38) キリスト教解禁前にも, ベッテルハイムが聖書の日本語訳を試みている。1858年出版の漢和対訳の『路加傳福音書』(「聖書和訳デジタルアーカイブス」<http://mgda.meijigakuin.ac.jp/mgda/bible/>)では, 「ムマノ 飯米サラ」, 1873年出版の平仮名による日本語訳のみの『路加傳福音書』(同上)では, 「むまのはんめさら」という語を用いた。しかし, ベッテルハイムは, 1855年に, ルカ福音書, ヨハネ福音書, 使徒行伝, ロマ書の琉球語訳を出版している。琉球語訳のルカ福音書 (<http://www.babelbible.net/bible/bible.cgi>)を見ると, 2章では「ムマノ ハンマイザラ」という表現を用いている。日本語訳の「ムマノ 飯米サラ」および「むまのはんめさら」は, 琉球語訳の「ムマノ ハンマイザラ」をそのまま使ってしまったものである(海老澤 1981: 130)。「飯米」「ハンメ」「ハンマイ」については、『沖縄語辞典』(1969)「hanmee」, 半田編著(1999)「hanmee」, 『沖縄語辞典』(2006)「ハンメー」を参照。なお, 13章15節の家畜小屋については, 琉球語訳では「ムマヤ」としつつも, 「クイ」と注釈している。日本語訳では, 1858年版で「ムマヤ」, 1873年版で「むまや」としている。
- 39) 聖書和訳デジタルアーカイブス (<http://mgda.meijigakuin.ac.jp/mgda/bible/>)。閲覧したのは, ヘボンとブラウンの『新約聖書路加傳』(1875), 翻訳委員社中の『新約聖書 路加傳』(1876, 1880, 1881), 『新約全書』(1880, 1881, 1882), 『引照 新約全書』(1880, 1889), 聖書常置委員会の『舊新約全書』(1887)。ただし, 『新約全書』(米國聖書會社, 1904年, 国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3430141>))は, 「槽」の振り仮名を「むまぶね」としている。
- 40) 聖書和訳デジタルアーカイブス (<http://mgda.meijigakuin.ac.jp/mgda/bible/>)。
- 41) デジタル『和英語林集成』(<http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/waei/search/>)。
- 42) 聖書和訳デジタルアーカイブス (<http://mgda.meijigakuin.ac.jp/mgda/bible/>)。
- 43) 同上。
- 44) 同上。
- 45) 「天草方言集」(<http://www.amakusa-shiro.net/hougen>)には, 「はみおけ」は「飼い葉桶 牛馬の飼料桶」と説明されている。また, 宮崎県肉用牛協会・社団法人宮崎県畜産会発行の「世界に翔く宮崎牛」No. 6(1994年11月号)では, 「11時からはみおけの清掃」という用例が確認できる (http://miyazaki.lin.gr.jp/sekai/bkno/00_bk_archives/miyagy_u06.pdf)。

- 46) 1875年初出の「飼桶」という語もあるが、これの初出例は『千夜一夜物語』の翻訳である『暴夜物語』に使われたものであり、普通に使用される語ではなかったのではないと思われる。
- 47) 聖書と訳デジタルアーカイブス (<http://mgda.meijigakuin.ac.jp/mgda/bible/>)。
- 48) 国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/825595>)。
- 49) この語は、日本正教会訳『我主イエスハリストスの新約』(1902)にも、「槽」として採用されている (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/825724>)。
- (i) 乃其豕子を生子、之を襁褓に裹みて、槽に置けり、旅館には彼等の爲に居る所なかりし故なり。(ルカ 2:7)
- (ii) 爾等襁褓に裹まれたる嬰兒の槽に臥せるを見ん、是れ其徴なり。(ルカ 2:12)
- (iii) 乃急ぎ來りて、マリヤとイオシフ及び槽に臥せる嬰兒を見たり。(ルカ 2:16)
- (iv) 主彼に答て曰へり、偽善者よ、爾等各安息日に於て其牛或は驢を槽より解き、之を牽きて飲はざるか、(ルカ 13:15)
- なお、既述のとおり、正教会ではイエスは洞窟で生まれたとされている(注14参照)。
- 50) 国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/825725>)。
- 51) フェデリコ・バルバロ訳『聖書』講談社、1980年。
- 52) フランシスコ会聖書研究所訳注『ルカによる福音書：原文校訂による口語訳』フランシスコ会聖書研究所、1975年。
- 53) 聖書と訳デジタルアーカイブス (<http://mgda.meijigakuin.ac.jp/mgda/bible/>)。
- 54) 同上。
- 55) 例えば、意識の多いリビングバイブルの流れを汲む『현대인의성경(現代人の聖書)』(<http://www.holybible.or.kr>)では、ルカ2章7節に、「(マリヤとヨセフ)は마굿간에泊まることになった」と補って訳している。しかし、『カトリック教会のカテキズム』(<http://info.catholic.or.kr/doctrine/>)では、イエスは「외양간」(漢字表記では「喂養間」)すなわち牛馬を飼う小屋で生まれたと訳されている。
- 56) 『표준국어대사전』(1999)「마구간」。他に、최(1978:462)、김(1974:130)、넓은풀이 우리말 방언사전(2010:352,155)。
- 57) 例えば、プロテスタント系の『개역한글(改訳ハングル)』(<http://www.holybible.or.kr>)や『개역개정(改訳改訂)』(同上)、韓国カトリック司教会議の『성경(聖經)』(<http://bible.cbck.or.kr>)は、구유(飼い葉桶)だが、共同訳の『공동번역(共同翻訳)』(<http://www.holybible.or.kr>)は말구유(馬の飼い葉桶)としている。
- 58) 四福音書を中国語に訳したジャン・バセ(白日昇)『四史教編』(1704年) (<https://bible.fhl.net/ob/ro.php?book=391&procb=1>)では、2章7節では、「馬槽」、2章12節と16節では「槽」と訳している(13章15節も「槽」)。聖書全体を初めて中国語に訳したロバート・モリソン(馬禮遜)『神天聖書』(1823) (<https://bible.fhl.net/ob/ro.php?book=179&procb=1>)では、2章では一貫して「槽」としている(13章15節では訳出せず)。『神天聖書』の改訂版である『代表訳本』(1855年) (<https://bible.fhl.net/ob/ro.php?book=214&procb=1>)もこれを受け継いでいるが、2章7節の「槽」に「槽或作厩」という割注をつけている(13章15節は「厩」)。5.1で述べた通り、『明治元訳聖書』に影響を与えたブリッジマン・カルバートソン訳の『新約全書』も、「槽」としている(13章15節では「厩」)。しかし、その後の主要な中国語訳聖書、例えば、プロテスタント系の『和合本』(<http://www.o-bible.com/gb/hgb.html>)、カトリック系の『思高聖經』(<http://www.sbofmlhk.org>)や『牧靈聖經』(<http://www.pbible.org/bible/>)を見ると、2章では「馬槽」(簡体字では「马槽」)が用いられている(いずれも、13章15節では「槽」)。近年になって、『環球聖經訳本』(<http://www.wvbible.org/> 環球聖經譯本-2)が「牲口槽」という訳語を用いた(13章15節では「槽」)。「牲口」は家畜を意味するので、家畜の餌を入れるものだけということを示すための訳語になっている。なお、「槽」あるいは「馬槽」以外の語を用いた例としては、東方正教会系の翻訳である『新遺詔聖經』(1864) (http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko08/bunko08_d0417/)が、「櫪」という語を用いている。この語は、「飼い葉桶」という意味もあるが、「馬小屋」と説明されることも多い。しかし、モリソンの *A Dictionary of the Chinese Language* (1815-1822) には、A stable for cows or horses つまり牛馬を飼うための小屋という意味が

掲載されている（『華英辞書集成』1996、ゆまに書房「樞」）。

参考文献

- Bauer, W. (2000) *A Greek-English lexicon of the New Testament and other early Christian literature*, revised and edited by F. W. Danker, 3rd edition, Chicago: University of Chicago Press.
- Cadbury, H. J. (1926) "Lexical notes on Luke-Acts: III. Luke's interest in lodging", *Journal of Biblical Literature*, 45(3/4), pp. 305-322.
- Cadbury, H. J. (1933) "Lexical notes on Luke-Acts: V. Luke and the horse-doctors", *Journal of Biblical Literature*, 52(1), pp. 55-65.
- Gijssels, J. (1997) *Libri de nativitate Mariae: Pseudo-Matthaei Evangelium Textus et Commentarius*, Corpus christianorum, Series apocryphorum 9, Turnhout: Brepols.
- Haupt, P. (1920) "The crib of Christ", *The Monist*, 30(1), pp. 153-159.
- Liddell, H. G. and R. Scott (eds.) (1996) *A Greek-English lexicon*, with a revised supplement, 9th edition, Oxford: Oxford English University Press.
- Montanari, F. (2015) *The Brill dictionary of ancient Greek*, Leiden: Brill.
- OED2 = *The Oxford English Dictionary* (1989) 2nd edition, Oxford: Oxford English University Press.
- 海老澤有道 (1981) 『日本の聖書：聖書和訳の歴史』新訂増補版，日本基督教団出版局。
- 沖繩語辞典 (1969) 国立国語研究所資料集 5，大蔵省印刷局。
- 沖繩語辞典 (2006) 研究社。
- 香月洋一郎・野本寛一編 (2002) 『民具と民俗』（講座日本の民俗学 9）雄山閣。
- 河野通明 (1990) 「馬鞆の伝来：古墳時代の日本と江南」『列島の文化史』7，147-181。
- 河野通明 (2000) 「農具から聞いた古代の人たちの話」『民具と民俗』上（ものがたり日本列島に生きる人たち 8）15-181。
- 現代日本語方言大辞典 (1992-1994) 明治書院。
- 国史大辞典 (1979-1997) 吉川弘文館。
- 小島幸枝 (1982) 「国語資料としての「スピリッタル修行」—その特質について」『獨協大学教養諸学研究』17 (12)，67-102。
- 小島幸枝 (1989) 『キリシタン版『スピリッタル修行』の研究：「ロザイロの観念」対訳の国語学的研究』笠間書店。
- 島根県方言辞典 (1963) 島根県方言学会。
- 白井純 (2004) 「キリシタン文献の「対ス」について：「スピリッタル修行」国字写本の表記に関連して」『北海道大学文学研究科紀要』113，125-140。
- 鈴木博 (1980) 「一五九二年天草版『ヒイデスの導師』の諸問題」『滋賀大学教育学部紀要 人文科学・社会科学・教育科学』30，176-157。
- 橘正一 (1937) 『方言讀本』厚生閣。
- 図説日本の馬と人の生活誌 (1993) 原書房。
- 図説民俗建築大事典 (2001) 柏書房。
- 東條操編 (1951) 『全国方言辞典』東京堂出版。
- 東條操編 (1954) 『分類方言辞典：標準語引』東京堂出版。
- 長崎県方言辞典 (1993) 風間書房。
- 能田多代子 (1963) 『青森県五戸語彙』，能田多代子。
- 半田一郎編著 (1999) 『琉球語辞典』，大学書林。
- 日本国語大辞典 (2000-2002) 第二版，小学館。
- 日本方言大辞典 (1989) 小学館。
- 日本民家語彙集解 (1985) 日外アソシエーツ。

- 김형규 (金亨奎) (1974) 『한국방언연구 (韓國方言研究)』 서울 (ソウル): 서울대학교출판부 (ソウル大學校出版部).
- 넓은풀이 우리말 방언 사전 (廣解方言辭典) (2010) 서울 (ソウル): 낱말 어휘정보처리연구소.
- 최학근 (崔鶴根) (1978) 『한국방언사전 (韓國方言辭典)』 서울 (ソウル): 현문사 (玄文社).
- 표준국어대사전 (標準國語大辭典) (1999) 서울 (ソウル): 두산동아 (斗山東亞).

Why do Japanese say that Jesus was born in a horse stable?

Tohru HIRATSUKA

Abstract

In Japan, it is often said that Jesus was born in a horse stable. But, in Western Europe, it is in a livestock stable that Jesus was said to have been born. There has been no research into the origin of the horse stable legend in Japan.

In the early Japanese Christian documents, the stable in which Jesus was born was often designated as an “umaya”. Etymologically, this word meant a horse stable. But, it was used to designate a cowshed as well. This suggests that, in the early Christian period in Japan, it was used in the sense of livestock stable. I proposed the hypothesis that, after the abolition of the Christianity prohibition, the word “umaya” was understood to mean “horse stable”, which generated the horse stable legend. This process may have been reinforced by other factors: (1) Prince Shōtoku is said to have been born in front of a horse stable. This legend may have influenced the nativity legend. (2) In English, “stable” is used to designate the livestock stable in which Jesus was born. But, this usage is archaic and the word usually means “horse stable”. This is misleading to the Japanese people. (3) As it was difficult to find an appropriate word to refer to the manger in Luke 2, Japanese translations of the Bible, such as the Meiji Version and the Taisho Revised Version, used the word “umabune”, which literally meant “horse manger”.

Keywords: Jesus, horse stable, *umaya*, *kirishitan*, Bible

